小説

茶陰

奈良本辰也

小説

茶隠

奈良本辰也

小説　葉隠
奈良本辰也

昭和五十一年八月三十日　初版発行
昭和五十一年十月三十日　再版発行
発行者　角川春樹
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二―十三
〈電〉〇三（二六五）七一一一大代表
〈振〉東京三―一九五二〇八〈郵〉一〇二
新興印刷・宮田製本

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
0093-872167-0946(0)
¥980

小説

葉隠

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

第一章

一

俺の親父どのは山本神右衛門重澄というて、天正十八年八月七日の生れでおじゃった。天正十八年といえば、関東で北条氏が降伏して、太閤さまが天下の平定を終えられた年よ。その次の年から、高麗の御陣が始まった。

高麗の御陣には、俺が祖父の中野神右衛門清明どのも御主君に従って彼国に渡ったものたい。ずいぶんの功労をたてられたと言わるる。祖父どのは、若年から戦さの場に出ること数知れず、そのたびに一番首・一番乗りの手柄をたてられた方でおじゃる。

そうじゃ、天正十二年島原の戦いで、龍造寺隆信さまが討死なされたときなんどは、お味方の軍は、どこもここも総崩れで、御主君直茂さまのお生命も風前の灯と思われた。このとき、逃れられぬことと覚悟をおきめなされた殿は、敵に首を渡すよりも自害じゃとすでに脇差をとっておられた。

その脇差にすがって、御自害を留め申し、どこまでも御帰還あって再起を図られるようにお諫めしたがわが祖父どのであったと聞く。一たん、御自害はお留め申したものの、敵が群がるなかを僅かの人数で切り抜けて退く戦いは、言葉ではつくせないほど難儀なものでおじゃったろう。

御主君も、神右衛門は生命の恩人じゃといつも言われていたそうな。その神右衛門に、六人の男と二人の女が生れた。父の神右衛門重澄は、その二番目の男子でおじゃる。中野の家は、兄の正守と姉の養子茂利が継ぐことになったので、重澄は外に出て山本助兵衛入道宗春の家に養子として入られた。

山本家の家禄でおじゃるか。さよう、四百石を少し越えたくらいであったかの。父神右衛門の晩年が四百三十七石五斗でおじゃったで……。この養子縁組は、大組頭の多久図書どのが仲介をとられた。図書どのは、武雄の後藤家忠さまのお子で、母は多久の城主龍造寺長信の娘でおじゃるから、お国にあっては名門の流れたい。ばってん、そいよりも武勇にすぐれた方でおじゃった。

さて、神右衛門重澄でござるが、これも祖父の神右衛門に似て、なかなかの豪気でおじゃった。いやのう、剛の者でおじゃった。いつも、家来たちに、

「おとん達、博奕を打て、嘘をつけ。大嘘をのう。一町歩くあいだに七回くらい嘘をつかんと男は立たんぞ」

というようなことを言われて、教えとした男じゃから、御想像出来申そう。自分で博奕をやられたことは聞いておらぬが、博奕も打てぬような男は、「いざ」というときに役に立たぬというお考えのようでおじゃった。

「嘘をつけ」

というのも、嘘言がよいというのではのうて、それを言うことで起る心の緊張を期待したのでおじゃろう。それに、つくり笑いをする者をひどく憎まれた。

「すら笑いす者は、男はすくたれ（卑怯者）、女はへらはる（淫乱女）」

と言われての。そして、いつも、
「ひとと話をするときは、真直ぐに相手の眼をみてせい。うつむいて話すようでは心もとないぞ」
とも申されていた。いや、きびしい御仁であった。そうじゃ、朝はいつも四時に起きられた。そして冬でも素裸になって行水をされる。身体を清めて下着を替え、月代を剃って髪を整えられる。髪には、いつも香を匂わせておられた。爪は毎日のように短く切って、それをこがね草で磨いておられた。
「身嗜みの悪い武士は、死におくれて、ぶざまのことになる」
というのが、そのお心であったようじゃ。毎朝の食事は、日の出どき、夜は早く床に就かれた。
「武士は食わねど高楊枝」
「内は犬の皮、外は虎の皮」
どのように内緒が苦しくても愚痴一つこぼされなんだ。さよう、草紙や読本の類は好まれなんだのう。家の中には、そのようなものは一冊もなかった。つねづね、
「中野の一門は、樫の木の柄で武辺をするのじゃ、草紙など開いてみる手は与えなかったはず」
と言うておられた。戦場には二度出られておる。慶長十九年の大坂冬の陣と、寛永十四年の島原の乱のときであった。大坂冬の陣のときは二十五歳、無理に御陣のなかへ加えてもろうたという。夏の陣のときは、お国の軍勢がまだ室の津に着いたばかりのときに戦さが終ったということでおじゃった。
島原の乱は、元和以後に始めて起きた戦さらしい戦さであった。百姓とは言うても三万八千人が

武器を持って立ち上ったのじゃからのう。豊臣の残党がまぎれ込んで指図をしておったというが、なかなかの駆引きを見せた。始めの頃は、あのキリシタンどものなすがままでござったからのう。

最後に原の城に追いつめたが、城の守りは固く、無理をして寄せられた板倉重昌さまはそのために討死をなされるという仕末であった。寄手の総大将が討死をされるということだけでも、この戦さがどれほどすさまじいものであったかお判りでおじゃろう。

そのとき、父の神右衛門どのは、四十七歳でおじゃったが、鍋島帯刀どのの組下として従軍せられた。鉄砲組三十人と副槍五人の頭として、いつも一番先に立っておられたという。いや、そのときの大将が勝茂公の御三男で、当時十九歳の甲斐守直澄さまの手に属しておられたとたい。この戦さでの甲斐守さまの働きは、のちのちの語り草になるほどのものでおじゃった。

どぎゃんした場合でも、全軍の先頭に立って戦われた。いつの日の城攻めにも一番乗りの功名を他にゆずられるようなことはおじゃらなんだ。そいだけに、父の神右衛門どのも、このときとばかり勇み立って進まれた。日頃の武辺をあらわすのにこの機会をはずしてまたとあろうかと思われての働きでおじゃる。

十一月十四日の一番攻めから、幾度びか戦さが交えられたが、不思議に運の強い方でおじゃった。はじめのうちは微傷だも負われなんだでのう。したが、あの板倉さまが討死なされた正月元日の総攻めのときは、余りにも勇んで前に出られたため、城中からの一斉射撃にあわれて、組頭の帯刀どのは討死、自らは大怪我をなされて足腰も立たぬほどの目にお逢いじゃった。この日の戦さの様子を聞かれて、殿は、

「神右衛門めは、よくやった。あの働きがあったればこそ甲斐守は無事に引きとれたぞ。甲斐守

のこの日の働きは、また格別であったからのう。したが、甲斐守にもこの辺りで、懲りてもらわんことには。帯刀は討死、神右衛門も足腰立たずの片端者というのでは、ちと犠牲が多すぎる」

と言うておられたという。島原の乱の最後の総攻めは二月二十六日でおじゃったが、この日の戦さには、ついに神右衛門どのは起つことは出来なんだ。後方の小屋で、鉄砲の音を聞きながら歯ぎしりしておられたとたい。

こぎゃんこつ話してくると俺の親父どのは、日頃の言動ばかりか、心のなかまで荒々しい方のように思われるかも知れぬが、本当は心の優しい方でおじゃった。家来などのうちに行いの悪い者がおって、間違いを起すようなことがあっても、その場ですぐに暇を出すというようなことはおじゃらなんだ。

暮までの給金を払って、静かに訳を話して他人の眼に立たぬようにして暇をやられたものたい。つねづね、

「罪は憎うても、人を憎んではならぬ。まして、一たんは主従の縁を結んだ者らじゃからのう」

と言うておられた。家来どもにも、この優しい心づかいが伝ってか、よく力を合せて働いたという。大坂の陣あとの城普請にも、殿のお言いつけで出てゆかれたが、親父どのの手の者の働きは格別であったとたい。あの城普請は、寛永元年春から行われたが、鍋島家の受持は、天守の石垣十九間でおじゃった。

親父どのは、二百人組頭の一人で、石を引く人夫の先頭に立ち、よく石にあがっては、浮立の唄などうたいなされたとたい。親父どのの唄を聞いておると、腹の底から元気が湧いたと申すでのう。

話が、後先になったが、島原の戦さのあと親父どのは暫く傷の手当をしておじゃった。それで傷

がいえると皿山の代官になられた。皿山は、高麗御陣のとき連れ帰った高麗の陶工たちによって開かれた山よ。

島原の戦さが終ると、世の中に不平の動きは止み申した。それに次第に民百姓の暮し向きもよくなったように思われたとたい。御時勢が、皿山で焼く磁器を要求したのでござろうか、あそこは大変な賑わいでおじゃった。高麗人ばかりでなく、お国の人々も入り込んで盛んに器を焼き出したのじゃ。

そのために品物の位が落ちての、粗悪な品が出廻るようになった。高麗人の注進をうけて、勝茂公もこれらの男女を追放しなければならんと思われた。

そのときの代官じゃから、これは難しい役じゃったと思うてよかろ。親父どのは、皿山へ行かれると直ぐに、お国の男女八百二十六人を追放された。まず、形を正して物事を考えられるのが親父どのの性質でおじゃったからのう。

ばってん、いんまと制をゆるめられて、技倆のある者には、国人でもそれに携わることを許されたとよ。むろんのこと、勝茂公にお願いしてのう。皿山代官のときは、牧場の経営にも乗り出しておらるる。

「馬も持たず、組にも入らぬ者は武士ではない」

とかねがね言うておられた親父どのらしいお気持からであった。馬は大切にしておられたよ。御自身は黒米を食べられても、馬には上白米を食わしておられたからのう。

さよう。六十九歳で代官を辞められ、城下に帰ってこられた。片田江の横大路に住まわれた。そうして、この俺が生れることになる。親父どのはそのとき、七十歳になっておられた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

二

「ホホウ、七十歳ですか」

と私が、いささか驚きの声をあげたときである。今どきならともかく、その頃は確かに人生五十年だった。七十歳を古稀というが、まさにそれまで生きる人は「古来稀なり」といってもよいような感じの時代である。私がいささかの驚きを心のなかに持ったとしても、おかしくはないだろう。すると、そのとき天の一角から声があった。

「もうよか。松亀ッ、その辺でやめておけ、その仁との話は俺がするぞ」

というのである。いま、天の一角からといったが、確かに私にはそのように聞えた。野太い声というのはこのような声をいうのであろうか。腹の底まで響いてくる声だ。

「あれ、まだ松亀などと呼んでいなさる。父上の名を許された神右衛門ですよ。常朝でございます」

と、先きの語り手は首をすくめて、天空を仰いだ。どこにも姿は見えぬのだが、声はあくまでも強く響いてくる。

「とにかく、その先きの話は、俺がするとたい、わさん（お前）は引っ込んでおれ」

と、否応は言わせない権幕である。

「ハハッ、ではこれで引きとらせていただきます」

と、先きの語り手が下ってゆこうとすると、

「ちょっと待て、言うて聞かせることがある。忘れてはおるまいの」
「……」
「曲者になれよ、日本一の大曲者にの」
「……」
「よーし、行け」
先きの語り手が、あたふたと下ってゆくと、天空の声は、
「やれやれ、安心しましたわい、あのことだけはたとえ吾子であっても、他の口から語って貰いたくござらぬでな」
というのだ。
「ひどく、恥ずかしがりやでございますね」
と、私が聞くと、
「いや、今でもあの当時のことを思うと冷汗がでるわ」
と、声まで少し小さくなる。
「恥ずかしがることはございませんよ。イギリスという国のトーマス・パーという爺さんは確か百二十歳を超えて子供をつくったといいますし、そうだ、私たちの時代にも京都清水寺の管長は八十歳余りで立派な赤ん坊をつくったといいますぞ……」
「そりゃ化物じゃ」
「戦国の名将といわれた上杉謙信も、ずいぶん晩年の子というじゃございませんか」
「晩年というても、長尾為景どのが六十歳のときの子であった。世間の口というものは六十歳で

も、それを稀なようにいう」
「なーに、五十、六十鼻たれ小僧ですよ」
「わさん（お前）達の時代は、きしょくに可笑しな世の中じゃからのう」
「エッ……」
「お前さん達の世の中は、ちと人間がおかしくなっておるということよ」
鋒先きが此方に向いてくる形勢だ。これはいけないと私は思った。こんなところで、わが昭和元禄の世相を批判されても仕方がないのだ。惜しいけれども、これはまた別の機会にゆずらねばならない。
「たしかあれは、皿山代官を辞められて片田江に御隠居なさっておられたときでしたな」
「くどいわい。おおかた俺が閑を持てあまして、つくったとでもいいたいのじゃろ」
「いいえ私は、人間というものの可能性について興味を持っておるのでございます」
「勝手にせい。俺はあのとき、ヒョイと嬶どのの蒲団をまたげただけじゃ」
そういえば、私の友人にもそのようなことをいう男がいた。彼も、ちょっと蒲団の端に足がさわったら、いつのまにか奥さんのお腹がふくれて、女の子ばかり四人もできていたというのだ。あの術だなと思った。
「まさかと思っておられたんでしょう」
「うん、嬶どのの腹がふくれてきたときは、腸満でもおこしたのじゃあないかと思うたよ。したが、嬶どの、いやばあさんコロッと元気での、食もよう進むし」
「それで……」

「まさか、水子にするわけにもゆかんでのう。ばあさんも授かり者じゃと頑張りよる。で、そのまま生せることにしたのじゃ」
「ハハア……」
「したが、ばあさんには外に出んことにして貰うたじゃ。なるべく人にも逢わんようにの。隠すのに苦労したぞ。そうして生れたのがあの子じゃった」
「元気に生れてきましたか」
「いやいや、それがのう、年とって出来た子じゃによって、水気が足りんのか、しなびた子じゃった。俺はすぐに耳もとに口をつけて、大声で叫んでやった。〝曲者になれよ、日本一の大曲者にの〟、と。赤ん坊をみたらいつも出る言葉じゃが、このときばかりは、ちと張り合いがなかったのう」
「眼に浮ぶようです」
「そこで、この子を人知れず仕末してしまおうと思うたのじゃ。家にくる塩売りの爺に子がないので、それに話をしてのう。里子にとってくれと頼んだ。塩売りの爺も俺の頼みじゃで仕方なく承知したよ」
「ちと、勝手が過ぎるようですな」
「うん、世間体というものがあるでの。ところが、それがどう伝わったのか、寄親の多久図書どのから突然のお召しじゃ。なに、子供のことは一言も書いてない。近日来図書どのの病いが重くなって寝ておられるが、いつも神右衛門のことばかり申されておる。一度、見舞いにきたらどうじゃという内容でござるよ。俺はすぐに飛んでいった。そうよ。図書どののおられる鳥坂までは二日か

かった」
「して、図書さまは如何でございました」
「御屋敷にうかがって驚いたよ。お元気でニコニコしてござる。〃御病気は〃と問うと、〃うん、其方の足音を聞いたのでなおったようじゃ〃と仰せられるのじゃ」
「まるで、狐につままれたようでございましたろう」
「まあゆっくりして行けとお留めなされるので、腰を落ちつけておると、〃何か変ったことはないかと〃おっしゃる。いや、変ったことと言えば大ありよの。俺が七十にして子供をつくったことよ……」
「御長男の吉左衛門どのの家では孫の五郎左衛門どのがもう二十歳になっておられたと聞きましたが」
「一歳の伯父と二十歳の甥じゃ。俺も、恥ずかしながらその話をせなけりゃならなんだ。そうしたら、図書どの大笑いをなされて、さてさて芽出たいことじゃのうと仰しゃる。男の子を生んだとは大手柄じゃ。大切に念を入れて養育せえよとのお言葉なので、何と答えようかと思うたが……」
「塩売りへ里子の話をなされましたか」
「やはり、それを言うてしもうた。すると図書どのは、〃とんでもない話じゃ、それはならぬ、お前の子として立派に育てい〃とお申しつけあって、名前も松亀とつけて下された。そればかりでなく、武者絵一幅、ぎおん扇一本、白麻十帖をお祝いとして下さったとたい」
「もう、逃れられぬ所ですな」
「おお、俺も観念したよ。ばってん、あの手紙はあまりに時宜がよすぎたのう。俺は、ばあさん

の訴えがあったのではないかと疑うとる」
私もそのように考えたが、ここで相槌をうってはならないのだ。ぐっとこらえて、
「しかし、情のあるよい計いでございましたな」
と付加えただけだった。松亀は如何にもしなびた、ひ弱そうな赤ん坊であったが、格別病気もしないで育っていった。山本家を訪れた人は、ときどき、神右衛門が赤ん坊の側で、
「曲者になるのじゃ、日本一の大曲者にのう」
と叫んでいる大声を聞いたという。神右衛門は、其後すぐに向いの沢部三郎兵衛が住んでいた屋敷のあとに移った。沢部家へは、彼の弟の平左衛門政良が養子に入っていた。そのすすめもあったのだろう。ことによると、今まで住んでいた家は、家相がよくないと思ったのかも知れぬ。何しろ神右衛門にいささか恥ずかしい思いをさせたのだから。
そして、沢部の屋敷に移ってからは、もう次の子は生れなかった。やがて、神右衛門はその沢部の家も引き払って、片田江から西へ少し隔ったところにある木原の里に隠棲した。木原は、広々とした水田地帯の真中にあり、幼い子供の環境としてはこの上ない良い場所であった。
いつのまにか天空の声は消えていた。風が一しきり吹いて、木々の梢を鳴らしたが、私にはそれが、
「わさんも、曲者になれよ」
と呼んでいるようであった。まだ聞きたいこともあった。しかし、致し方ないのでこれから暫く私の筆としよう。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.